マルコによる福音書　12：13－17
「わたしは誰のものか」

２０２６年２月１日(主の日)
藤沢北教会　長倉基牧師

今日は『皇帝のものは皇帝に、神のものは神に』という主イエスの言葉は、信仰者としての責任、社会的責任について考えさせられます。ます。身近なことですが、数週間ほど前のこと、信徒でない人とこういう話をしたことがあります。わたしは誰のものか教会の食事の時はなぜお酒を飲んではいけないのか」。アメリカが禁酒法の時代に多くの宣教師が日本に来た影響で、わたしたち日本のプロテスタント教会はお酒を飲むことをよしとはしない風潮があります。ありました。と言ってもいいかもしれません。今や洗礼を受けたからお酒を飲んではいけない、と教える教会はほとんどないし、そう思っている人もいないからです。カトリック教会やヨーロッパのプロテスタント教会にはもともとそのような考え自体もありません。「お酒を飲んではいけない」などという決まりは教会にはないのです。けれども、なおわたしたちは教会の行事ではお酒を飲まないことにしています。家では飲むけれど教会の建物の中では飲んではいけない、というのであれば、それは何の意味もありません。そうではなくて、教会の交わりにおいては、さまざまな事情がある人たちがだれでも安心して参加できる必要があると考えるからです。一言でいえばアルコール中毒の問題です。そういう課題のある人は参加できなくなってしまいます。当人だけでなく、家族も傷を負っている場合があるのです。中毒の診断を正式に受けていなくても、問題がある人もいるわけです。自分の事情を主張してもらうのではなく、最初から安心して参加してほしいのです。わたしたちのキリスト教会の信仰は、律法主義ではない、とよくいいます。こうでなくてはいけない、こうしなくてはならない、そういうルール、宗教用語では戒律ともいいますが、そういうことが信仰に生きることではないのです。

私たちの信仰は「律法主義」ではありません。聖書は「あれをしてはいけない、これをしてよい」と細かく規定したルールブックではないのです。しかし、だからといって「何でもあり」の無節操な生き方をするわけでもありません。この世に信仰者として生きていくには、ある一線があります。それは押し付けられた規則ではなく、信仰に基づいて自分で考え、責任をもって下す「判断」の中に引かれる線です。そしてその判断は、教会の中だけに留まるものではありません。もし、教会での配慮が「隣人への愛」から生まれるものなら、それは教会の外、つまりこの社会全体に対しても同じように問いかけ、広げていくべき責任となるはずです。先程のお酒の例であれば、教会の集会でお酒を飲まないことが、事情がある人への配慮だというならば、教会ではないところでもやはり同じ配慮が必要だということになるでしょう。

旧約の時代から主イエスの時代、使徒の時代、そして現代に至るまで、神を信じる群れは常に、自分たちが身を置く世の中とは異なる価値観を持って生きてきました。 かつては異教の神々との戦いがあり、主イエスの時代にはローマ帝国の圧倒的な支配がありまし

た。そして現代の私たちは、「神などいなくても自分一人でやっていける」「自分が神だ」という、ある種の無神論的な罪の誘惑の中に生きています。このような「世」の価値観が渦巻く中で、何が神の民としてふさわしい歩みなのか。神に対して、そして社会に対して責任ある生き方とは何か。自立した信仰者として、 自由な、しかし責任ある判断をもとめられる私たちに、今日、主イエスは力強い励ましを投げかけてくださいます。 「あなたは神のものだ。皇帝のものでも、世間のものでもない。神のものだ」と。この言葉がすべての始まりなのです。

「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」という主イエスの言葉は決してこの世でうまくやっていくための妥協のための答えではありません。「皇帝」がわたしたちにとって何を意味するかはこのあと考えますけれど、さしあたり、「信仰と相容れないこの世の権力」と考えておきたいと思います。この主の答えを聞いたわたしたちは、「いったい何が皇帝のもので何が神のものか」という問いに直面させられます。

「皇帝に税を納めてよいか」という問いは、「言葉尻を捕らえて陥れようとして」発せられた、と記されています。殺意を抱いていた指導者達、祭司長、律法学者、長老たちは、ここでファリサイ派やヘロデ党の人たちを送り込みました。ファリサイ派は律法を守り清く生きようとした人たちです。もし「税を納めてよいと」はっきりいってしまえばファリサイ派は反対し、民衆の評判を落とすことになるでしょう。「税は納めてはいけない」と反対すれば帝国に迎合していたヘロデ党が帝国側に密告することになる、という意味で罠だったわけです。そのように主イエスを陥れようと発せられた問いですけれど、この問い自体は、もともと当時のユダヤの人たち、指導者たちのあいだでは大きな問題でした。ローマへの納税は、異邦人に支配されていることを意味し、皇帝を崇拝することに加わるとも考えられたからです。そこで様々な考えと姿勢が生まれました。ヘロデ党はローマの支配に迎合しました。権力に屈し、この世で力を持つことを優先したのです。信仰からはかなり遠い姿勢です。ファリサイ派は純粋な信仰を求めましたけれど、真っ向から反対運動を起こすようなことはしませんでした。しかたなくしぶしぶであったかもしれないけれど、納税自体はしていました。妥協せざるを得ないと考えました。ここには出てきませんけれど、もっとはっきりした態度を示していたグループがあります。熱心党といいます。ローマの支配に徹底して反対し、ときおり暴動を起こしていたグループです。ゲリラ組織と言ってもいいかもしれません。当然納税にも反対で、納税せずにローマ当局から目をつけられていたに違いありません。今の言葉でいうなら原理主義者です。完全に対決の姿勢をとっていたのです。納税の問題はローマに対してどのように信仰的態度をとるかがよくあらわれる、深刻な問題でした。だからこそ指導者たちはこの質問を選んだのです。ですから、わたしは主イエスはこの問いに真剣にお答えになったと思います。もちろん主イエスはどんな問いに対してもいつも真剣にお答えになっていると思いますけれど、言葉尻を捕らえようとしているからうまくきりぬけよう、けむにまこう、などとは思っておられなかったに違いありません。「あなたは神のものだ」。主イエスは目の前の、自分を陥れて殺そうと

する人たちにすら、そう伝えたかったに違いないのです。
ファリサイ派、ヘロデ党、熱心党の姿勢と態度について考えてみまして自分を振り返ってみますと、わたしたちの姿勢は、ファリサイ派の妥協の姿勢に近いように感じます。ヘロデ党の迎合によっていく場合もあるかもしれません。対決ということも、時には起こるかもしれません。納税ではないけれど、わたしたち日本のキリスト教会は、激しく不当な弾圧には戦わなければいけなかった歴史があるのです。けれども、主イエスはこの人たちに、あなたは正解、あなたは不正解、などとはおっしゃいませんでした。このどれでもない道があるのです。「神のものを神に返しなさい。」この答えは引掛け問題に対するうまい切り返しなどではありません。何が神のものなのか、問いなさいと言われていると思うのです。
思い出していただきたいのですが、この時からほんの数日前に主イエスはエルサレムに入られ、すぐになさったのが宮清めでした。ローマの銀貨を神殿で献金するわけにはいかないので、両替商がいました。これも単なる決まりではありませんでした。デナリオン銀貨には皇帝の肖像がきざまれていました。そしてその銘とは「神の子・皇帝ティベリウス」というものだったのです。つまり皇帝とは支配者を意味するだけでなく、神の子とされていたのです。ユダヤの人たちに取って極めて信仰的な問題だったのです。神でないものを神と認めよ、と迫られていたのです。人間はおそらくいつの時代もそのようなことをするのでしょう。日本も第二次世界大戦中に天皇を神とし、拝むことをキリスト者にも求めました。主日の礼拝の前に「宮城遥拝（きゅうじょうようはい）」と言って、皇居の方に礼をすることを政府は強要しました。わたしたちの式次第は前奏から始まっていますが、その前に「宮城遥拝」と記されている戦時中の週報を見たことがあります。大変ショックでした。そして、このようなことに対する教会の姿勢も実はさまざまでした。うけいれられないと行わなかった教会がありました。しかし、多くの教会はしぶしぶ受け入れました。牧師が逮捕されるよりはましだと考えたのです。そしてまた、「日本人はみな天皇の臣民なのだから」、といって積極的に協力した教会もあったのです。宮城遥拝は一つの例にしかすぎません。あらゆることでその当時の日本という帝国は教会を支配し、迫害しました。国家だけではありません。一般の人も強制されて、あるいは忖度して、また積極的にこのようなことに加わっていたのです。ほんの８０年前のことです。そして、このような精神は今もどこかにくすぶっていると思います。いつぶりかえしてもおかしくない、とわたしは思っています。その時に主イエスが「あなたは神のものだ」と恵みの言葉を語り続けてくださることに信頼をおきたいのです。
デナリオン銀貨には皇帝の肖像が刻まれていました。「これは、だれの肖像と銘か」と主イエスは問われます。「皇帝のものです」と彼らは答えます。では、神の像が刻まれているのは何でしょうか？創世記第一章では神がわたしたち人間をお造りになったことが語られます。「神は言われた。『我々のかたちに、我々の姿に人を造ろう。……』。神は人を自分のかたちに創造された」。

わたしたち人間こそが、神の像を刻まれた存在なのです。銀貨に皇帝の像が刻まれているように、わたしたちには神の像が刻まれている。ですから、「神のものは神に返しなさい」とは、「あなた自身を神に返しなさい」「あなたは神のものなのだ」という宣言なのです。これは重荷ではありません。「あなたは神に愛され、神に守られている」という恵みの言葉です。わたしたちが神のものにしていただき、神に自分自身をお返しする歩みは、喜びであり、また神が喜んでくださる生き方です。どんなに世の権力が圧力をかけようとも、どんなに皇帝が「わたしを拝め」と迫ろうとも、「あなたは神のものだ」と主イエスは宣言してくださいます。

そこでもう一つ考えておかないといけないことがあります。主イエスの時代には世の権力者は皇帝でした。もちろんある程度自由はありましたが、すべてを握っていたのは皇帝です。第二次世界大戦が終わるまでの日本も同じです。主権者は天皇だったのです。皇帝に税を収めるというのは財産の一部を差し出すことであり、それは皇帝の意のままに用いられて文句は言えなかったのです。けれども今は違います。この国の主権者はわたしたち市民です。わたしたちが実際に収めている税金は、お上に召し上げられているのではありません。社会のために使うようにと預けているだけなのです。預けて税金となった自分の財産の一部がどのように使われるか、わたしたちは自分の意見を伝えることができるし、そうするべきです。そうすると少し事情がかわってきます。納税すること自体は、わたしたちとって異教礼拝でもなんでもありません。それよりも、納めた税金が正しく使われるかどうかの責任すら負っているのです。来週選挙があります。わたしたちはこの国の主権者として、この社会の行方に関わる責任があります。これは義務というより、恵みによって与えられた自由です。ですから、この投票も信仰と切り離すことはできないのです。お酒について、隣人を愛することから生まれるはずの配慮が必要だといいました。同じように、隣人を愛することを個人だけの問題ではなく社会の問題としてもとらえたとき、選挙とつながってくる。果たしてこの人の政策は隣人を愛することと関係があるか、残念ながら隣人を愛さないようなことを声高に主張する候補者もいるのです。現実には１００％賛同できる候補者はいないと言わざるを得ないでしょう。でもいつの時代もそういう人はいないのです。それでもなお責任ある判断をしなくてはならない。聖書にはだれに投票しなさい、とは書いていません。教会が「この人に投票しなさい」などとは少なくとも今はありえません。わたしたち一人ひとりが責任ある社会人の前に、責任ある信仰者として自分で考えて祈って投票に向かう必要があります。

わたしたちの納税は異教礼拝ではないといいましたが、なお、わたしたちに神ではないものを神とするようにとせまる力はあります。集めたものを自分の利益のために使おうとします。民衆を扇動します。おおげさにいえば、自分が神であり、わたしたちに命を差し出すことを求めるのです。権力を持ったらそういう誘惑に完全に勝てる人間はなかなかいないでしょう。そして世の人はそれに迎合して権力の側に付く人がいます。そこで決断が迫られます。そしてまさにその時に主イエスはわたしたちに語りかけてくださるはずです。

「神のものは神に返しなさい。あなたたちは神のものなのだ」と。けれども、私たちはそれを忘れて、自分の中にある神の姿を見失ってしまいました。何が正解で何が不正解か。妥協か、迎合か、あるいは秩序を破壊する反対か。そのようにしか物事を見ることができなくなってしまったのです。しかし、主イエスは、そのような私たちを十字架によって取り戻してくださいました。主イエスが「神のものは神に返しなさい」とおっしゃった時、その視線の先には十字架があったに違いありません。主イエスご自身が、何よりも神のものとして、ご自分を神にお返しになった。それが十字架です。それは私たちの罪を背負って、罪を断罪することでした。神のものであることをよしとせずに離れていった私たち罪人を、主はもう一度、神のものとしてくださったのです。

冒頭でお酒の話をしました。教会の交わりで、すべての人が安心して参加できるように配慮する。それは律法ではなく、隣人への愛から生まれる自由な判断でした。同じように、この社会の中で「神のものである」わたしたちは、どう生きるかを自由に、同時に責任をもって判断することができます。これは主イエスがあたえてくださった恵みです。主イエスが十字架によってわたしたちを取りもどしてくださり神のものとしてくださいました。だからこそ、わたしたちは世の中で迷うことがあっても、恐れる必要はありません。「あなたは神のものだ」という主イエスの恵みの言葉が、わたしたちを支え、導き、自由にしてくださるからです。わたしたちの生活、人生すべては「神のものとして生きる」という喜びの中にあります。この恵みの中を、共に歩んでまいりましょう。